

朝鮮引揚者のライフ・ヒストリー

——成原明の植民地・引揚げ・戦後

洪 郁 如
田原開起

一、はじめに

1. 「植民地」, 「引揚げ」, そして「戦後」

1945年の日本の敗戦を境目に、帝国の外縁部に居住していた日本人の多くは「内地」だった日本国内に「帰る」こととなった。「引揚者」⁽¹⁾と称されるこうした人々の体験は、おおよそ①植民地の時期、②引揚げの過程、および③戦後の三つに分けられる。地域や個人の人々の体験により、三つの部分の比重は異なる。

従来の歴史研究においては、研究対象としての三つの領域は、それぞれ独立して論じられる傾向にあった。まず、旧日本植民地に関する研究は、日本国内だけではなく、台湾や韓国の学界においても大量の蓄積がある。これに対して「引揚げ」というテーマはかなり遅れて、近年ようやく注目されるようになってきた。次に引揚げ研究の場合、何故「帰る」必要が生じたのか、そしてその地に至った経緯を説明するために、多くの著作は帝国の植民地史まで遡及して考察したのである。さらに帰国後を扱った研究について、それらは広義での引揚研究の一部に含まれる。ただし、戦後日本社会での生活の定着をめぐる諸問題の研究は、農地開拓と関連する諸問題を除けば、前二者に比較して明らかに少ない⁽²⁾。

戦前の植民地および終戦前後に跨る日本人の記録を如何に読み解くのか、本稿は成原明さん（以下敬称略）の手記を手掛かりにこの問題を考察する試みである。成

(1) 大辞林第三版では「引揚者」は「外国での生活を引き払って故国へ帰ってきた人。特に第二次大戦後、外地から内地へ帰ってきた人」と定義される。

(2) 文化人類学者の島村恭則は、本稿と同様、「内地」から引き揚げた後の民衆の生活を主題とする「引揚者の戦後」の研究が、課題として未着手であると指摘する。島村恭則編『引揚者の戦後』（新曜社、2013年）を参照。

原明の記録は、植民地生活、引揚げ、帰国後の生活というはっきりとした三部構成をとる。本稿は、植民地生活、引揚げ、帰国後の農地開拓という三つの部分を別個の歴史的事象として捉えるのではなく、経験者のライフ・ヒストリーとしての一貫性を重視しながら、そこに内包された「折り畳まれた帝国」⁽³⁾日本国家の史的連続性を明確にしたい。

本稿の構成としては、まず成原明の手記と関連史料について説明を行ったうえで、当該手記の特徴と価値について考察を進めていく。親子の手記は資料一、二として付録に含める。

2. 成原明の手記と周辺の関連史料

本稿は「引揚げ」の記憶を分析することにより、ライフ・ヒストリーにおける三つの段階の歴史的経験を位置付ける試みである。具体的な分析対象は、広島県在住の成原明の手記である。本人の手記を元にして、著者の一人（田原）が複数回のインタビューを行った。

成原明は1925（大正14）年7月8日、河村家の次女として朝鮮全羅南道木浦常盤町で生まれた。父親の英夫は1921（大正10）年、朝日新聞社京城支局に就職するために当時の植民地朝鮮に渡った。母親は茶道・華道・水引細工の師匠であった。1930（昭和5）年、彼女が5歳の時、父親が北鮮日日新聞社を立ち上げるために一家は咸鏡北道の羅南に移った。1931（昭和6）年に羅南公立尋常小学校に入学し、1937（昭和12）年に羅南公立高等女学校に入学した。1940年に父親は北鮮日日新聞社を退職し、日本製鉄清津製鉄所の社内新聞の編集担当となり、戦後に日鉄社長となった三鬼隆のもとで、訓示・祝辞等の原稿執筆を担当することになった。彼女は1942（昭和17）年に女学校を卒業し、翌1943（昭和18）年に結婚、さらに翌1944（昭和19）年10月に長女を出産した。1945（昭和20）年8月のソ連軍による清津爆撃の後、八か月に及ぶ過酷な逃避行が始まり、1946（昭和21）年3月によりやく38度線を越え、釜山から日本に戻った。帰国後、夫の実家の山形でしばらく暮らしたあと、1948（昭和23）年秋に広島県に入植し、現在に至る。

(3) 浅野豊美による概念である。浅野豊美「折りたたまれた帝国——戦後日本における「引揚げ」の記憶と戦後の価値」細谷千博等編『記憶としてのパールハーバー』ミネルヴァ書房、2004年、273-315頁。

本稿筆者の一人である田原は、成原ご夫妻とは20年来の知己である。齢90歳を迎えた彼女から、「数年前、個人史をメモ程度にまとめた」と聞いたのは2014年のことだった。「北朝鮮で生まれ、戦後母国に帰り、未知の地で夫と共に、ユートピアを開こうとして、必死に生きてきた。それら、越しかたをふり返って記録にとどめようと思ったのが2008（平成20）年のことだ」という。しかし、その記録は公開されることもなく私的なものとして密かに保管されているという。田原は「私的な記録であっても、後世のために是非、公表してほしい」と再三にわたって要請した。本人は当初、「私の体験など取るに足りない」との思いからか、公表にはあまり積極的ではなかったが、娘さんの後押しもあって、その記録を見せてもらうことになった。手記は2008年7月8日の誕生日を過ぎたあとに執筆がはじまり、約1か月で書き上げられた。執筆のきっかけは、自分の母の人生についてあまりにも承知するところが少なかったので、何時かの時点で、子どもたちが自分と同じ思いを抱く日が来るかもしれないと思って書いたという。特に成人までの植民地時代を念頭に置いたとのことである。ノートに手書きされた原稿は、全文で約15,000字であった。

この手記の周辺について重要な関連史料は二つある。一つは父親である河村英夫の手帳である。もう一つは戦後から現在までの本人の日記である。前者は1945（昭和20）年8月9日に清津を離れてから9月21日に元山の収容所に入った頃までの記録である。当時51歳だった父親が、妻、三人の娘と二人の孫を連れて避難する途中で手帳に走り書きされた記録である。成原明によれば、この日鉄の手帳は1960（昭和35）年に亡くなった英夫の遺品の中から、家族が見つけたものである。8月9日と14日は日付だけが記入しており、15日と16日は二、三行しか書かれておらず、また最後の9月21日も日付のみとなっている。恐らくは収容所までのどり着き、ほっと一息付いたことで記録をやめたのだろう、という。

父親の手帳は、2008年に成原が手記を執筆する際に、とりわけ逃避行の記憶を補完するのに重要な参考資料となった。その他、本稿を執筆する過程で発見した資料として、この手帳をもとに河村英夫本人が書き下ろした詳細な記録「逃避行——今は亡き家族たちの霊に捧げる」が、田中四郎等編『清津脱出記』⁽⁴⁾に収録されて

（4）田中四郎等編『清津脱出記』清津脱出記編纂委員会（日鉄企業内）、1975年。

いる。1949（昭和24）年に日本製鉄の清津製鉄所の引揚者が「今のうちにあの脱出、引揚げの貴重な体験なり思い出を集めたい」と話し合い、二、三年をかけて関係者から原稿を集め始めた。しかしその後、日本製鉄の解体・分離、新会社の設立などによって編集に遅延が生じ、その後、再び原稿が整理され出版されたのは、1975（昭和50）年のことだった⁽⁵⁾。つまり同書の出版は、河村英夫自身が他界した後のことであった。

さて後者の資料は、1950（昭和25）年から今日まで60年間以上の日々について克明に記された成原明の戦後日記である。本人によれば、「60年間書き続けてきた日記は育児日記に始まり、闘病記、やせ地で収穫がままならず食糧不足との戦いの記録である。その上、七年間も電燈のない暗い夜が続いた貧乏物語である。その中で子どもたちは育ち、それぞれ巣立って行った。その後は主人と二人だけのもとの暮らしになり、美しい自然の中でそれぞれに楽しんだ。花は主、鳥を友として。先年一人になった。この暮らしはいつまで続くのだろうか」という。未公開の個人文書であるが、それは女性の視点からみた引揚げの戦後史、また戦後日本農村史の貴重な記録だといえる。

二、歴史の時間

成田龍一の研究によれば、引揚げの体験を記述した書物の出版時期には、1950年代前後と1970-80年代以降という二つの波がある⁽⁶⁾。これに比べると2008年に執筆が開始されたこの手記については、いくつかの特徴を指摘できる。

第一に、癒されぬ心の傷である。前引の成田論文では、「いま」という第三の時間に対し、引揚げの時間を第一の時間とするならば、それが記述される第二の時間との間では個人的、家族的、社会的な環境との調整が必要とされ、1950年代前後と1980年代以降に、その折り合いがつけられることが多かったという⁽⁷⁾。しかし

187-197頁。

(5) 田中四郎等編『清津脱出記』清津脱出記編纂委員会（日鉄企業内）、1975年。序文と編集後記を参照。

(6) 成田龍一「『引揚げ』に関する序章」『思想』955号、2003年11月、151頁。

(7) 成田龍一「『引揚げ』に関する序章」『思想』955号、2003年11月、152頁。

ながら成原の事例は、むしろ「折り合いをつける」ことの難しさを物語っている。

父親の手帳について説明するとき、成原は次のような感慨をもらしている。「私が一人でこの手帳を胸がふさがる思いで読むことになろうとは思ってもいなかった。……過酷な日々であったのに、60年近くも経てば、記憶もだんだん薄れてゆく。私にはもう余り時間は残されてはいない、そのうちそのうちに、今日まで延ばしてきた。記憶を呼び起こしながら書いておこうとするのだが、どうしても書けない。意識の底に古傷は残っているのか、時たま逃げてくる時の夢を見てうなされて飛び起きることがある。頭の中に残された古傷は、今も傷むことがあるのだろう」。収容所で目撃した「その家族の心中が手に取るように臨場感を伴って思い出され、心を未だに苦しめる」と述懐している。書くことには、まずこうした記憶の蘇生による多大な苦痛を伴う。当然、一方で、書くことを通じてこうしたトラウマからの克服を求めることもありうる⁽⁸⁾。だが、記憶をたどって文字化し、出版にまで至る者はむしろ、引揚げ体験者のなかでは少数であろう。

第二に、第一の時間と第二の時間の間で、体験者本人の「読む」行為について、深く注意を払う必要がある。言い換えれば、戦後の日本社会、そして他の引揚者との間に、何らかの交流が存在しうる点を考慮すべきである。ここではとりあえず「読む」ことに限定していえば、1945年から60数年の歳月にわたり、成原は同世代の引揚げ記録や、研究者による引揚げ関係の書物を渉猟してきた。これは「同時に戦後引揚げた多くの同志が、すでにその体験は語っていることなので、自分が今さら取り立てて口外することもない」との思いを強めさせる。同じような体験を持つ女性性は日本全国に数限りなく居るとの意識は、彼女が「決して私の個人史ではない」と、頑なに口を閉ざした原因でもあった。

一方、「読む」行為には記憶の確認という側面も存在する。既読書のなかには高崎宗司著『植民地朝鮮の日本人』⁽⁹⁾が含まれる。「この通りだ。私も同じように思

(8) 例えば、清水徹『忘却のための記録：1945-46 恐怖の朝鮮半島』ハート出版、2014年（清水徹『忘却のための記録：北鮮の凍土に眠る同胞に捧げる』（精文館書店、1980年）の復刻版である）。書く行為がもたらす寄与はその書名からも理解される。ちなみに、清水氏は1930年生まれ、ソ連軍侵攻の際に羅南中学校三年生であった。

(9) 高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』岩波新書、2002年。

った」「自分の思い違いではなかった」と同感したところには、傍線が引かれてい
る。傍線は清津、羅南関連の記述には多かった。同書が植民地批判という明確な立
場を示すことに関連して、植民地問題に対する成原の思いについては次節で詳論し
たい。

第三に、「いま」という第三の時間の意味である。記述が行われた第二の時間では、冒頭に示したように、次世代の家族に自分史を残す思いが強かった。そして手記を筆者に見せ、自ら語り始めたのは、筆者（田原）の要請があったことを除いては、齢90歳の節目を迎えようとする昨年、それらの多くの話を埋もれたままにしてはならないとの思いもあったろう。そこにはまた、今日の時勢に、いままた「来た道を繰り返そうとしている」ことへの危惧も大きかったという。

三、よみがえった他者：朝鮮人についての記憶

「日本人社会と朝鮮人社会」という対比軸は、成原の手記全体を貫いている。彼女の語りは、出生の地である朝鮮から始まった。親族のネットワークに乏しい植民地の日本人家庭を支えたのは、雇われた現地の朝鮮人たちであり、仕事のために留守がちな両親の代わりに、子どもの寂しさを慰めたのは、お手伝いの若い朝鮮人女性であった。その存在は、成原の幼年期の記憶には大きく映し出されている。

幼少期における朝鮮人との接触は、その後の彼女の植民地史観に影響を与えたようである。成原の語りの重要な特徴の一つは、植民地で過ごした記憶のなかで、日本人家庭や社会を主軸にしながらも、絶えず朝鮮社会を想起し、両者を対比させている点である。手記の中に「移住してきた日本人と、朝鮮の人達が、別々に離れた土地に暮らしているのは普通のことだと思っていた。しかし、実情は日本の進出にともなって朝鮮人は郊外に追いやられ、中心部を日本が占拠したのである。子どもの頃には、何も知らなかったし考えたこともなかった。日本の身勝手であった」と述べている。生まれた地である羅南の地理的空間を鮮やかに再現し、近代的な町並みを懐かしみながらも、その裏側で犠牲を強いられる朝鮮人社会の存在を指摘している。

度重なる恐怖、飢餓、傷病、死や暴力の体験は、朝鮮北部からの引揚げ記録に共通して多く描かれる所であるが、彼女が記述を行った第二の時間において、朝鮮人

社会への視線は帝国の植民地統治の歴史を強く意識したものになっている。避難の行列の中には日本人だけではなく、「リヤカーの上に、お産したばかりで白いチマチョゴリを血に染めた朝鮮の女の人が引かれて行く姿」もあり、60年間の歳月を経てもまだ鮮明に記憶されていた。

これまでの引揚げ記録には、敗戦後、日本人に対して態度が一変した朝鮮、中国や台湾など現地の住民に戸惑い、恐怖や敵意を感じたとの記述が少なくなかった。だが、成原の手記はこうした点の記述について非常に慎重である。「畑のジャガイモを掘っても見逃してくれていたのが、追いかけて来て石を投げる。そして口々に『日本が負けた』と叫ぶ」、「青いリングを日本人が畑から盗んだと追ってくる朝鮮の人」、「姉と一緒に朝鮮人の家の手伝いをした。食事を食べさせてもらうだけであった。敗戦によって日本人と朝鮮人の立場は逆転してしまった」。現場に居た第一の時間において実際に感じた不安をそのまま忠実に記しながらも、その原因については日本人である自分自身に帰している。

「しかし、日常接することの少ない現地の朝鮮の人たちのことは何も知らず、日本人社会でぬくぬく暮らしていた。朝鮮語も覚える必要は全くなかった。後に敗戦になり、山中を逃げまわると、民家の人に『一晩泊めてください』ということばを一生懸命覚えたのに、今では思い出せない」と述懐している。現地語、現地社会との関係が「不要」から「必要」に急転したことは、ともすれば敗戦への後悔や、現地人の「裏切り」に対する怨恨を呼び起こす。だが、この衝撃的な体験は、急転が生じる前の、現地人社会との無縁・無関心を容認し可能ならしめた構造に目を向けさせ、そこにあった帝国植民地の統治そのものの思い出させる貴重な瞬間でもあった。記述が行われた第二の時間までの長い間に、日、韓、中をはじめとする東アジアで起こった様々な出来事、それらを記した書物、言論などを取り入れながら、人々は過去の経験を自らの内部で醸成していくのであろう。

四、「内地帰還」と入植を再考する

このような「日本人社会と朝鮮人社会」という対比軸とともに、「植民地日本社会と内地社会」という軸も語りの中で交錯している。すなわち「植民地育ち」という自己意識が戦前の家庭生活を眺める視線となる。植民地生まれの日本人二世にと

って、「内地」とは外国のような母国でもあったと、これまでの研究は指摘している。近くて遠い心理的な感覚は、内地との関わりの部分にも現れている。植民地期における三回の内地渡航には、内地の同世代の人と同じ体験をさせ、祖国に親しみを持たせようとする保護者と学校側の思いによるものでもあった。だが、親元であり、出生の地である朝鮮という故郷は依然として恋しく、安心感を得られる土地でもあった。

引揚げの世代的差異について、植民地の日本人一世とは異なり、植民地生まれの二世は自分の意思で渡航したわけではないため、引揚げも「帰る」というよりも、「連れて帰られた」という受動的な側面をもったことを朴裕河は指摘している⁽¹⁰⁾。植民地生まれの彼／彼女は、戦前に多少の内地への旅や長期滞在の経験を持っているが、引揚げによる戦後の帰国は、そこが新しい生活の場になるため、これまでとは性質が異なる。ジェンダーの視点からみれば、既婚女性にとってそれは、新たな生活の場としての内地／母国である上に、内地の実家からも離れ、見知らぬ土地での暮らしに直面する、という二重の適応過程を背負わなければならなかった。

戦後日本の農地開拓は、帝国植民地の歴史と密接な関係を持ち、国内開拓の成否はその入植者の植民地経験に直結していた。すなわち、満州移民など農業開拓のバックグラウンドを持つ者には成功例が多かった。これに対し、植民地で公務員、会社員、教員などホワイトカラーだった者は、農業の知識と経験が不足しており、そして一般に村落での新しい人間関係を構築することに熱心ではなかったため、入植が数年間で挫折する事例が少なかったという⁽¹¹⁾。これらの点について、成原の経験の特徴は以下のようにまとめられる。

第一に、戦前の職業からみれば、成原明の出身家庭も夫のそれも植民地期の中産階級であり、農家ではなかった。しかし夫は東京帝国大学の農学部実科出身であり、敗戦までは陸軍獣医大尉だったという経歴が重要であろう。田原の聞き取りの際に、彼女は以下のエピソードを語ってくれた。ある時、町内のどこかに出かけていた夫に対して、村の有線放送を通して「○○集落に患畜が出ました。そちらへ移動して

(10) 朴裕河「『引揚げ文学』に耳を傾ける」『立命館言語文化研究』24(4)、2013年3月、115-136頁。

(11) 斎藤多美江「2つの事例に見る戦後開拓の実態：段山開拓地と千振開拓地から」『情報化社会・メディア研究』10、2013年、52,62-63頁。

ください」と呼び出されるくらい、町民に頼りにもされ、親しまれていた。またある時、脱走した牛が、庭に干してあった粃をたらふく食べ、その粃が腹の中で膨らみ、放置しておくに命に関わるというので、すぐに切開して胃から内臓物（粃）を取り出さねばならなくなった。夫は頼まれて、その農家の庭先で急遽切開したこともあった。東京帝大農学部実科出身ならではの技であった。当時それができる獣医師は地方にはいなかったの、近隣の獣医たちが大勢見学を訪れたという。

第二に、動機について、手記でも示されたように、戦後、戦犯として公職追放となったため、また食糧難から山形の大家族での共同生活から生計の独立を図ることが必要となった。当初、近くの村から生乳を集めてバターの製造を始め、都会部に販売した。ところが生乳が企業に買い占められるようになったため、自らの土地で牛を飼い生乳を確保するために、牧場を持つことを計画したのである。これは「乳と蜜の流れる桃源郷を作る」という夫の理想だった。

第三に、入植地については、希望に合致する土地を選ぶ際、とくに親戚、縁故者のいる土地に限定せず、全国各地を対象として探し続けた点である。最初に強く希望した富士山麓は、夫の学生時代の軍事教練で行ったことのある場所だった。しかし結局、県内出身者が優先されたため諦めざるを得なかった。そのうちに広島県の生家（双三郡板木）に戻っていた実家の父親の河村英夫から声をかけられ、県内の現在地（世羅郡）に夫婦で入植することになった。河村もすでに戦前の植民地ホワイトカラー層から農業へ転職していた。

第四に、入植におけるジェンダーの相違に留意したい。引揚げまでは中産階層の裕福な生活を続けていた彼女は、最初は「夫の理想、夢の実現のために、なんで自分が付き合って開拓地に入らなければならないのか」と気が進まなかった。それでも妻、母の役割を果たし、「昭和23年秋にススキと笹の土地に初めての一畝を入れた。その頃6畳一部屋に親子4人（主人31歳、私23歳、勝子4歳、一途1歳）で住んだ。割り当てられた面積を開墾する為に、主人は月夜の晩も開墾鋤を振るった。荒起しされた土の塊を砕いて、笹の根を取るのが私の仕事」と記しているように、お互いに協力し合った。しかし夫が獣医の仕事で外出することが多くなると、妻一人で畑を耕し、子育てもする、想像以上に厳しい状況になったという。「何の不自由もなく教育をうけさせてもらった娘時代とは打って変わって、入植した開拓地では、食料を持って帰るはずの夫を、三人の子どもとともに、空腹を抱えて夜通

し待った」こともあったと、戦前と戦後の生活を対比しながら回想している。

五、ジェンダーの視点と女性の経験

引揚げ過程における日本人女性への性的な暴力について、これまで当事者による告発の不在という現象が常に取り上げられた。まず、被害当事者の女性たちの沈黙について、その原因は生々しい性的な暴力、その後の治療や中絶手術、身体をめぐる痛みと屈辱、悔しさを伴う記憶であり、思い出したくない出来事であるため、当事者らは現在に至るまで沈黙を守り続けるのだと説明される⁽¹²⁾。また、記述の他者性の問題として、1950年代に書かれた手記は、自ら被害を回避し得たものが他者の体験として見聞した内容として書きとめられる、という特徴も指摘されている⁽¹³⁾。

だが、直接被害を受けた否かを問わず、性的暴力の現場に居合わせた女性に、その後に記述の仕方に注文を付けることは過酷であろう。出来事について記述に徹した形式は必ずしも傍観的な「他人事」を意味しない。引揚げ文学研究では、五木寛之が1960年代に、「バケツを叩く音」に悩まされる引揚げ体験を小説に取り入れた⁽¹⁴⁾。これに関する朴裕河の分析によれば、そこには「語っていないながら語っていない」という特徴があり、つまりまだ正面から書くことができないが、間接的な形ででも書かねばならない、という状況が存在した⁽¹⁵⁾。数十年経っても依然として記憶に傷めつけられることから考えれば、記述することそれ自体が傷跡を正視する実践的な行為であり、犠牲者への追悼と鎮魂でもある。なぜなら現場の出来事を記述する行為者は、死と隣り合わせの極限状態に居た「私」にほかならない。如何なる記述のスタイルであっても、それらは体験者が自分自身および政治、社会などを

(12) 坪田＝中西美貴「引揚げ援護活動と二日市保養所——女性引揚げ者の沈黙のなかで」(帝国崩壊とひとの再移動：引揚げ、送還、そして残留)『アジア遊学』145, 2011年9月, 202頁。

(13) 成田龍一「『引揚げ』に関する序章」『思想』955号, 2003年11月, 166-167頁。

(14) 五木寛之「蒼ざめた馬を見よ」『五木寛之小説全集第一巻 さらばモスクワ愚連隊』講談社, 1979年, 169-235頁。1967年12月発表。

(15) 朴裕河「『引揚げ文学』に耳を傾ける」『立命館言語文化研究』24(4), 2013年3月, 126-127頁。

含む外部環境と折り合いをつけた一つの結果であろう。

引揚げの同行者でもあった父親の手記に比較すれば、成原手記においてはセクシュアリティの問題が多く記述されている。以下は手記中で性的な暴力の脅威に触れた四つの場面である。一つ目は、避難途中でソ連兵から逃れるため、日本人女性たちが髪を切られて男装をしたことであった。「女は頭を刈り男装し、ナベ底のススを顔に塗って汚し、帽子を深くかぶった。18歳の妹も豊かだったおさげがみを父の手で刈られた」。女性性の抹消を余儀なくされたことについて「悲しさと恥ずかしさで、いつもうつむいていた」と、若き妹の心境を追記している。

二つ目、避難途中の宿泊先におけるソ連兵の暴行。夜ともなると暗い校舎の中でソ連兵がピストルを突きつけて「女を出せ」「時計万年筆を出せ」と身体検査をする。暗闇の中からピストルの音が毎夜のように聞かれた」恐怖の経験である。

三つ目は、駅でのソ連兵による公然の性的な暴力。「数日たって南へ移動する列車が出るという情報を聞き城津駅に集合し何時間も待った。その間にもソ連兵が少女を追う。荷物と人ごみの間を『助けて』と悲鳴を上げて逃げまどう」という。

四つ目は収容所の夜間に起こるソ連兵による暴行。「夜になると、ソ連兵が『ヤポンスキーマダムを出せ』と収容所に入ってくる。そんな気配を察したら、素早く天井裏、中庭の繁みにかくれた。早く気付いたものが石油の空かんや洗面器の底を、棒切れで叩き収容所中に知らせた。方々からガンガンとなるすさまじい音で退散させた。今でも、この種の音を聞くと当時を思い出し、身震いがする。ある夜、近づいてくる足音に素早く姉と妹を窓から庭へ逃がし、私は勝手をしっかりと抱きしめ、母は顔や頭にグルグル包帯を巻いて病人を装い呼吸をひそめて暗闇の中でふるえていた。思いきり赤ん坊のお尻をつねって泣かす⁽¹⁶⁾。「ダバイダバイ」(よしよし)と大きな手で、寝ておれというしぐさをして部屋を出ていった。生きた心地がしなかった。とてつもなく長く感じられた時が過ぎ、やっと足音が遠のくのを聞き、姉

(16) 女性たちの自衛の方法として、顔の黒塗りと幼児の尻をつねることが記述される。朝鮮北部からはほぼ同じルートで引揚げた清水徹によれば、男装だけで見破られやすいため、顔をできるだけ汚して、たとえ女であることがわかったとしても嫌悪されるようにする。効果がなかったときには幼児の尻をつねって泣かせる。ソ連兵は何故か子どもの泣き声が嫌いだったという。清水徹『忘却のための記録：1945-46 恐怖の朝鮮半島』ハート出版、2014年、77頁。

と妹を部屋に入れる。幸いにも私たちは難を免れたものの、少し経って外の部屋から突然の悲鳴とパンパンという銃声が聞こえた。抵抗して撃たれたのであろう」と。

女性への性的な暴力の問題に限って言えば、ネーションとジェンダーの要素が重なり合い、いっそう複雑な様相を呈する。トラウマの深刻化のみならず、中傷など二次被害の恐れも残る状況では、告発することの困難は想像に余る。また、女性の被害は「民族の受難」として国家の論理に回収されやすい点も無視できない。語られなかったことは何か。引揚げをめぐる五木の作品分析で、朴は語られなかったものの一つとして、「なぜこういうことがあったのか」という問いであると指摘する⁽¹⁷⁾。これまでの引揚者による回想記のなかに、それに対する答えにあたるものとして頻出するのは、敗戦の無念、ソ連兵の横暴、関東軍の無力などのフレーズである。これに対し、成原手記はその「なぜ」を敢えて語っていない。植民地生活への思いから引揚げの動乱、入植の苦労まで、そして現在に至る長い時間幅を持たせた彼女の語りを読み直すと、それぞれの時期の内的な連関を意識しながらの記述であることに気付く。その「なぜ」は、20世紀初頭に帝国の家族物語が始まって以来、語り手が交錯させた「日本人社会と朝鮮人社会」「植民地日本社会と内地社会」という二本の対比軸のなかに答えを見出すことが可能ではなかろうか。

六、おわりに

「植民地時代」「引揚げ」「戦後」は、一見してそれぞれ異なる歴史的経験を指す言葉のように思われるが、日本近現代史のなかで互いに緊密な相互関係を有している。個々人のライフ・ヒストリーのなかでも同様に、各時期は決して無関係ではなく、むしろ互いに強い結び付きと連続性が見られる。こうした連続性に重点を置くことにより、はじめて出来事のもつ歴史的な意味を見出すことができる。このような縦の関係性ととともに、帝国の外縁であった地域間の横の比較作業も可能であろう。例えば、成原手記も含めた朝鮮北部や満州地区の事例を植民地台湾からの引き揚げ記録と比較すると、後者の記憶における引揚げ過程が占める割合いは、植民地時期

(17) 朴裕河「『引揚げ文学』に耳を傾ける」『立命館言語文化研究』24(4)、2013年3月、127頁。

の思い出や戦後の暮らしに関するものよりもはるかに小さい⁽¹⁸⁾。

最後に、今という第三の時間における成原手記の意味を考えたい。手記の公開に際し、成原氏からぜひ断っておいてほしいことがあるという。その一つは、「何せ今年卒寿で記憶も衰えたし、記憶違いもある。記録したことにウソがあるかもしれない」ということを、くれぐれも断っておいてほしいとのことである。ただし、当然ながら、もし事実誤認があった場合、すべての責任は筆者の側にある。

もう一つは、植民地生まれの彼女にとって、当地での生活はあまりに恵まれ、何不自由のない生活であった。しかし、それが「他国とそこに生きる朝鮮の人々の犠牲の上に成り立っていたことを、全く知らないままに生きてきた」。敗戦後になって、他者の犠牲の上に成り立っていた幸せであったことに気づき、慙愧の至りであるという。この偽らざる気持ちを率直に表し娑婆を終りたいという。

第三に、今日、いままた「来た道を繰り返そうとしている」ことを危惧している。いつまでも「戦後」であってほしい。再び「戦前になることの無いように」どうしても訴えたい。まさに、「老婆心まで付け足したいのです」という。「子どもの軀を無造作に処理する場面が地球上にあってはならないのです。皆さん頼みます」。戦禍をくぐった者の、心からの祈りに似た言葉である。

以上、「日本人社会と朝鮮人社会」と、「植民地日本社会と内地社会」という二つの参照軸を中心に成原手記に即して考察を行ってきた。「植民地」「引揚げ」「戦後」を含む傷痕の記憶は、国民の物語に回収されることを回避しうるのは、成原の語り

(18) 台湾の場合は、引揚げ自体が比較的に平穏に行われたため、引揚げ自体に関する記述に重きを置くことが少なく、それよりも植民地時代に過ごした「故郷としての台湾」への思いが多く綴られている。そして戦前の生活との落差、故郷の喪失を意識しながら、引揚げの「後」、つまり戦後の日本社会での生活への違和感が多数、提起されている。そこで植民地統治を如何に評価するか、植民地の日本人二世の「郷愁」を如何に捉えるかという問題は、台湾研究の領域では様々な角度から議論されている。以下を参照。顔杳如「流転の故郷之影——殖民地経験下在台灣日本人的故郷意識・建構與転折」『跨域青年学者台湾史研究論集』稲郷，2008年，173-217頁。呉佩珍『真杉静枝與殖民地台湾』台北市，聯経，2013年。洪郁如「導読 湾生記憶如何閱讀：我們準備好了嗎」『南風如歌：一位日本阿嬤的台湾鄉愁』蔚藍文化，2014年，9-22頁。

からヒントを得られよう。それはむしろ自らの物語の中に、他者を見出し、その歴史的な意味を「日本人」の自分と家族の物語に編み入れる作業であったろう。こうした作業を行うことによって始めて、日本内部に収斂しがちな記憶の痛みが、日本の外部にも開かれるようになる。歴史の現場にともに居た相手の痛みや境遇を理解し合い、第一の時間から生じるかもしれない素朴な愛憎の念を乗り越えるのであろう。物語を外に開き、外部との対話空間を創り出すことで、二度と繰り返したくない悲劇を初めて回避できると思われる。

資料一、成原明の手記

1. 子どもの頃

私は1925（大正14）年7月8日、次女として朝鮮（現在韓国）^{ゼン ラ ナンドウモツ ポ}全羅南道木浦常盤町で生まれた。いわば植民地生れである。父は、1921（大正10）年、星雲の志を抱いて、玄界灘をわたり、現在の韓国京 城^{ケイジョウ}の朝日新聞社京城支局に職を得て渡来した。

1922（大正11）年3月に姉由美が生まれ、1927（昭和2）年7月には妹純江が生まれた。そののち父は、北鮮日日新聞社を立ち上げるために、1930（昭和5）年、私が5歳の時、^{カンキョウホクドウ}咸鏡北道^{ラ ナン}（北朝鮮）羅南に移った。地図を広げてみると本当に、はるばる北のはてまで行ったものだと思う。ロシア・満州（中国）との国境を控えた羅南は、当時日本の北の守りを固める軍都であり、^{セイシン}清津港はウラジオストック、日本海、新潟港、敦賀港を結ぶ貿易港であった。羅南は日本海航路や、関釜連絡線で日本人が新天地を求めて、移住してくる新興土地であり、道庁所在地であった。

父は北鮮日日新聞社の記者として、母は茶道・華道・水引細工の師匠として働いていた。羅南は旧日本軍19師団司令部のあった所で旅団司令部もあった。旅団司令部の4つの連隊（歩兵二つ・騎兵・山砲）の兵舎・官邸・官舎が整然と立ち並び、赤煉瓦の美しい街であり、気の引き締まるような街でもあった。その他に陸軍病院・練兵場・射的場・飛行場等があった。

町の中央には公園があって、公園を境にして、一般民間人や、単に物資を納入する商人、更には公務員などの官舎があった。そして町のはずれには、現地朝鮮の人たちの部落もあった。移住してきた日本人と、朝鮮の人達が、別々に離れた土地に暮らしているのは普通のことだと思っていた。しかし、実情は日本の進出にともなう朝鮮人は郊外に追いやられ、中心部を日本が占拠したのである。子どもの頃には、何も知らなかったし考えたこともなかった。日本の身勝手であった。

日本人が創った禅宗の寺が経営する幼稚園に妹をつれて通い、冬には赤赤と燃えるストーブのまわりで歌を歌ったり、折紙を折ったりしたことなどを、かすかに思い出す。父がいる新聞社が近かったので、中に入ってみると、左の人差し指と中指に煙草をはさみ、原稿用紙に鉛筆を走らせている父が、煙草の煙の中にあつた。原稿用紙片手に植字をする目にもとまらぬ手の動きに見とれたり、輪転機がまわる度にインクの匂がブンブンする新聞がバサバサと出る様子を見ていた。文学青年だった父は、懸賞小説を書いていたこともあったという。父は文士崩れのハイカラな人で、酒豪でもあった。そんな父を支えるために、母は陸軍官舎や女学校の課外授業（茶華道・作法）、大きい料亭の出稽古にでかけていた。

夜間も陸軍病院の看護婦寄宿舎、炭鉱主の邸宅などに請われて教えに出かけ、家計をやりくりしていた。日曜日には当時の職業婦人であった電話交換手が家に稽古に来ていた。私たち子どもはネイヤ（お手伝い）のお春さんが世話をしてくれていた。稽古先には、前日お花を配達するチョンガの二郎君が来ていた。使用人が代わってもチョンガは「二郎君」と呼び、ネエヤは「お春さん」という名前に母は決めていた。手振りで日本語を教え何とか通じていたようだ。醤油（テンジャン）、味噌（カンジャン）、お母さん（オモニ）、お父さん（アボジ）、旦那様（ヤンバン）、ありがとう（コーマブシュミダ）くらいは、今でも覚えている。父は母よりも時間に余裕があり、よくカレーライス、スープなどを作ってくれた。夕方には三人姉妹を連れて大きな市場に買い出しに出かけてくれた。

1931（昭和6）年に羅南公立尋常小学校へ入学した。煉瓦造りの大きな校舎だった。朝鮮の人たちだけの学校は普通学校といい（就学年齢も1年遅かった）チョンガの二郎君も2代目に代わり、ネエヤのお春さんもお嫁に行ってお菊さんに代わった。母が夜の出稽古に出た後、父は私たちが眠った後でこっそり外出した。目を覚ました私たちは寂しくて泣きだした。その声を聴いて夜学帰りのお菊さんが

家に入ってきて朝鮮の昔話をして、母が帰るまで居てくれた。優しいネエヤだった。お正月には一家揃って玄関の前で記念写真を撮ってもらうのが新年の行事だった。父母を中心に前列には晴れ着の三姉妹と、両側に学生服の二郎君やネエヤのお菊さんも写った。姉は大きいジョー（嬢）チャン、私は中のジョー（嬢）チャンと呼ばれていた。

目上の者には絶対逆らわれないようになっていたが、姉とはよくけんかをした。悪いのはいつも私で、父母が家に帰ってくると留守中のことを姉やネエヤが言いつけた。勝気な私は姉さんの指を噛んだりしていた。たとえ悪くなくても年上の者が正しいという教育だったので、悪くなくても私が怒られた。悔しくて悔しくてならなかった。

7か8歳（昭和6-7年）の頃のことであろうか、一家揃って何日間か内地に帰った。父の生家（広島県双三郡板木村羽出庭、現三次市）の先祖の墓参りをするためだった。芸備線の甲立駅からタクシーで板木へ着くと、タクシーが珍しいのか村の子どもたちが集まってきた。その後、伯母伯父とともに宮島見物をした。寄ってきた鹿へ餌をやったこと、市内の川に浮かぶ川船で牡蠣飯を食べたことなど、おぼろげながら思い出す。本当に懐かしく思い出す。

小学校1年の頃、学校帰りには、お琴の稽古に行かされ、小さい爪箱がスカートのポケットの中で、カラカラと鳴り、お師匠さんの家に着くと半紙に包まれたお菓子が待っていた。オヤツにつられて毎日通った。「六段の曲」から「千鳥の曲」へと、次々に難しい曲に進んでいくのが母の楽しみであったのだろう。お琴の会がある度に着物を新調してくれた。まだ子どもであったのに大人になっても着られるようにと、肩揚げ、腰揚げをたっぷりして着せてもらった。会の度に弾く曲は、いつも六段か千鳥だったので70年以上経った今でも、昔のことなのに口ずさむことができる。その他の習い事として、三人姉妹に母が好きだった仕舞（能の中のおしまいの部分の謡）を習わされたということもあった。

後になってから思えば娘たちが「植民地育ち」と、笑われないようにとの思いがあり、普段のくらしの中で躰の意味もあって習い事をさせてくれたのであろう。「植民地育ち」は贅沢に暮らしているので、「植民地育ちの娘は嫁にもらうな。もらうなら内地からもらえ」と言われていた。

姉は羽衣、私は猩^{しょうじょう}猩^{しょう}、妹は仕舞^{しまい}箆^{えびら}をしっかりと覚えさせられた。父や母の謡で舞

ったものだ。習い事ははじめは親からすすめられたことであったが、いつの間にか自分から進んでやるようになった。「鉢の木」の話のくさり（一部分）である「おお、降ったる雪かな」の部分を自然に覚えている。

母が釣鐘マント（足首までかくれる、当時はやりの釣鐘のようなマント）をまとい、雪を踏みしめて玄関に近づく足音を、眠らずに待っていたこともしばしばあった。学校から帰り「ただ今」と玄関を開けると、華やかな履物が幾組か揃えてありああ今日は母が家にいる内稽古の日だと、足音を立てないように通り過ぎようとすると、部屋の中から母が「お茶をいただきなさい」と声をかけるので、しぶしぶ席に着きお弟子さんのお点前でお菓子・お茶をいただき、やっと解放された。行儀作法を教える立場の母は、足を投げ出し、無作法なふるまいをするとびしりとたたいた。躰は厳しかったが、貧しい人や病気の人たちを思いやり、いろいろ援助していた。母のことを思い出すと、あれこれと際限ない。

父はお酒が好きで酔えばフランス国歌を歌い、遊ぶことは何でもかんでも達者であった。座布団をくるくる巻いて着物を着せた人形をパートナーにして、レコードに合わせて一人ダンスをしたりしていた。娘たちには、ハイカラな洋服を大阪大丸デパートの通信販売でとり寄せて、着せてくれていた。出張のたびにおみやげを忘れずに買ってくる子煩悩な人であった。

北鮮の冬の気温はマイナス20度にも下がっていたが、子どもの頃には厳しい冬だとは感じなかった。水を溜めれば、公園広場や運動場が一夜にしてスケート場になった。そこでスケートをしたり、橇^{ソリ}をつかって川を下ったりして遊んだ。だんだんと日が暮れてあたりが暗くなるころになると、朝鮮の物売りの子どもの声がかきこえてきた。寒さに震えているのか、もの悲しい声で「焼き栗」「ロシアパン」と商っている朝鮮の少年の声がもの哀しかった。勝手口にはオモニ（お母さん）が頭の上（木をくりぬいた舟形の入れ物）に品物を乗せ、行商に来て「〇〇はサオー（〇〇はいかが）」と毎日のようにやって来た。道路には石炭を運ぶ人夫と赤牛（朝鮮牛）の姿があった。寒さで人夫の髭や牛のよだれに、つらら（氷柱）が下がっていた。しかし、日常接することの少ない現地の朝鮮の人たちのことは何も知らず、日本人社会でぬくぬく暮らしていた。朝鮮語も覚える必要は全くなかった。後に敗戦になり、山中を逃げまわると、民家の人に「一晩泊めてください」と言うことばを一生懸命覚えたのに、今では思い出せない。

小学校に入学したころ 1932（昭和 7）年に上海事変が起こり、その後 1937（昭和 12）年の日支事変（日中戦争）へと長い戦争が続いていくが、内地（日本）と比べ、戦争中とは思えないほど、当時の北鮮での日々は平和でのんびりしたものであった。学校では綴り方（作文）の時間に、いつも「戦地の兵隊さんへ」という慰問文を書き、慰問袋（30 cm 四方の袋）にタバコ・石鹼などと一緒に入れて送った。

羅南の町の半分くらいは軍と軍関係で占められていた。羅南川をへだてて民間人の町、郊外に朝鮮人集落があった。日曜・祭日には外出を許可された兵隊さんのカーキ色の軍服でにぎやかだった。早朝には起床ラッパが兵舎から、すがすがしく流れる。夜は就寝ラッパが淋しそうに、もの悲しそうに尾を引いた。寝る時は上官にたたかれ、ラッパの音が「新兵さんは可哀そうだね」と聞こえてきたという。

2. 羅南公立高等女学校入学

1937（昭和 12）年、私は羅南公立女学校に入学した。陸軍病院の広い敷地には傷病兵と白衣の天使が歩くのが見えた。（後に張^{ちやう}鼓^こ嶺^{ほう}事件の折には、女学生だった私たちも傷病兵の看護を手伝い、包帯巻もした。）

鉾木資源が豊かなことから、日本企業（日鉄・日紡・窒素・日魯漁業・日本高周波等々）の北鮮への進出は、1940（昭和 15）年頃から目覚ましくなった。日鉄工場予定地の土地は高騰し、羅南―清津^{セイシン}間には事務所・工場・溶鉾^{セウ}炉^ロがそびえ立ち、社員住宅には日本各地の製鉄所（八幡・釜石・室蘭・広畑等）から転任した職員とその家族であふれた。工具には現地の人も大勢使用され急速に企業城下町に変わっていった。

この年父は北鮮日日新聞社を退職し、清津^{セイシン}製鉄所の社内新聞発行に携わることになった。戦後日鉄社長になった三鬼隆氏のもとで、訓示・祝辞等の原稿書きをすることになった。そのため、羅南の住まいから製鉄所の社宅（清津）に引っ越しをした。広大な土地に突然現れたような日鉄の社宅は、その当時としては最新設備の文化住宅であり、当時すでに水洗トイレ・電気炊飯器があり、暖房はベチカであった。女学校へはバス通学となったが母は稽古場へ通うのが遠くなって気の毒であった。しかし、日に日に戦争色も濃くなって、お茶・お花よりモンペをはいて勤労奉仕にかり出される時勢になって稽古事ができなくなった。しかし、時間には余裕ができたようだった。

1941（昭和16）年12月8日、その日の朝は格別の寒さで校庭に真っ白い霜がおりていた。校長先生が朝礼台上に上り「日本と米英が戦闘状態に入った……」と訓示を述べられた。すぐ生徒一同は白い息をはきながら校庭を何周か走らされ、皇軍の武運長久、英霊の鎮魂を祈りに羅南神社へ参拝に出かけた。勤労奉仕で授業も少なくなり体操の時間は軍事教練のようなこともするようになった。実弾射撃の実習もあり、引きがねを引いた時の胸に響いた感触は今も忘れられない。修学旅行は、戦時下であっても続いていたが、私たちの時が最後になった。しかも「聖地巡拝（神社仏閣参拝）」という名目で、清津港から敦賀港へ、日本海を往復する船内二泊のコースであった。京都・奈良・東京へと短縮されたが6日くらいはかかったのだろうか。初めて見る日本の首都東京は、女学生たちの胸をときめかせた。

1942（昭和17）年に女学校を卒業した私は、三つ上の姉の時と同じように、父母の考えで祖国を知らなければと、東京の親戚の家で1年間過ごした。その頃、空襲警報が一度か二度発令されたように思う。喫茶店には、もう、あんみつ、コーヒー、ケーキなどはなく、あるのはレモン水くらいのものだった。宝塚歌劇、新派の芝居、新国劇には連れて行ってもらった。

3. 8月21日結婚

1943（昭和18）年、少し体を悪くして呼び戻され清津に帰った。その年、夫（当時19師団獣医中尉兵馬廠の隊長）と見合い（4月29日）の末、同8月21日結婚した。現在では到底考えられないことであるが、当時は陸軍大将の許可がなくては将校の結婚は認められなかった。しかし、順調に羅南神社で挙式をとりおこなった。夫26歳私は18歳であった。

三姉妹のために早くから支度をしていてくれた振袖の花嫁衣裳は、戦時下では、人の目に触れては非国民ということになるので着なかった。残念がった母が式当日の朝写真だけは撮りたいと、わざわざ夫に来てもらい玄関前で写したものを日本に送っていたので、幸い現在も残っている。大きなサイズの写真は当時内地へ送ることができなかった。主人には、馬当番と官舎当番の二人の兵隊さんがついてしたが、結婚後は馬当番だけになり「大尉殿お迎えにまいりました」と、馬を引いた兵隊（青木さんという40代の人の良さそうな新潟から召集された兵隊）さんが、毎朝と夕方に馬で主人を家まで送迎してくれた。青木さんや当番兵とは、上司と部下と

いう上下関係なしに、宿舎でともに飲み、門限時間に遅れると証明書を書いてやりたりした。「酒飲みに娘を嫁にはやらない」と言っていた母は残念がったのとは反対に、父はいい飲み相手ができたのを喜んでた。たびたび官舎に遊びにきては、二人で飲んで私を困らせた。

その年の12月大尉に進級し星が一つ増えた。次の年(1944年)、新年を迎えて間もなく北支へ転勤の命令が下った。その数日前には義兄(養子)が召集され、後にニューギニアの戦地へ向かった。

羅南駅まで主人と一緒に見送りに行ったばかりであった。(その時姉は妊娠2カ月であった) 主人の部隊は京都で編成されたので、京都まで山形県から主人の父も出て来て、三人で三日間を京都で過ごし、父は山形へ帰って行った。その後、京都から奈良へ移り、奈良で部隊が再編成されるまでの一か月、猿沢の池のすぐ近くのホテルで過ごした。その後主人は北支へ、私は再び清津へ帰るつもりでいたが、当時は日本海航路の切符を手に入るのが難しかった。そのため、しばらく大阪で法律事務所を持っていた弁護士の伯父の家で世話になった。伯父の手配でやっと連絡船の切符が手に入り、新潟港から出港までの一か月間伯父の家で過ごした。旅館への手配など万端整えてもらった。伯父もその後大阪の空襲で病に倒れた。今は生まれ故郷の板木(広島県三次市)の山中で、先祖の傍に眠っている。

4. 昭和19年10月11日午前8時 女児出産

私はやっとのことで、清津の日鉄社宅にたどりついたが疲れと、つわりでぶらぶらと月日を過ごしていた。父母の許しで何の不自由なく過ごした。母は義兄と主人に陰膳を備え、毎日武運長久を祈ってくれた。内地では空襲も日に日に激しくなり、サイパン・ガダルカナル硫黄島の玉砕が報じられたが、その頃の清津はのんびりしたもので、ときたまB29が高い上空を飛んでいくのを、手をかざして眺めたりしたものだ。1944(昭和19)年10月10日の朝、陣痛が始まり翌、10月11日女児を出産した。産婆さん、母、姉の懸命の励ましの声の中で出産した。8百匁(約3000g)だった。おりしもラジオからは軍艦マーチが流れ「大本営発表 わが海軍は太平洋において大戦果を上げたり」と繰り返した。たぶん比島沖の戦いだったのだろうか。

一週間たって初めて庭にゆっくり降りてみた。寝巻の上から仕立て下ろしの銘仙

の羽織を羽織って少し歩くと、ひやりとした空気の中で丹精込められた菊が香り立ち、気高く咲いていたことを60余年経った今も忘れない。実家にいて何の気遣いもしないはずなのに、母乳が出なかった。それに引き替え姉は絞って近所の赤ちゃんに上げるほど、お乳の出が良かったので勝子も飲ませてもらった。

春になって暖くなると、乳母車に二人の孫を向い合せて乗せて散歩するのが母の楽しみであった。B29が飛来する回数も日に日に多くなり警報のサイレンが鳴るたびに、小さい防空頭巾をかぶせ防空壕の中に入った。老人、妊産婦、乳児を抱えた者以外は、それぞれの家を守った。沖縄の玉砕をラジオで聞き不安の募る日々であったが、誰も口には出さなかった。その後に恐ろしい事態が、やがてここにもやってこようとは夢にも思わず、日を追って激しくなる内地の空襲と食糧難を気の毒に思っていた。そんな中で、まだ北朝鮮はいいなと思っていた。これも北の守りをしてくれている兵隊さんのおかげだとありがたく思っていたのである。

5. 敗戦と引揚げ

1945（昭和20）年8月6日、広島に新型爆弾が投下されたということを自宅（日鉄の社宅）のラジオで聞いたのは8日のことだった。父や母は広島在住の伯父伯母の無事を祈った。翌9日未明一瞬何が起きたのかわけのわからぬ恐怖を感じた。眩いばかりの閃光（照明弾）で、生きた心地がしなかった。おびえながらも夜が明け、いつも通り父と姉が会社に出勤したが、昼前にあわただしく帰られる。すると、避難命令が出て、一刻も早くここから逃げるのだという。

9日にはソ連軍が清津を爆撃した。港に上陸するのも間近いことだと言うことで、住民に避難命令が出された。日ソ不可侵条約は一方的にソ連によって破棄され、ここは間もなく戦場になった。身支度をし、背中に勝子を括りつけ両手におむつ、父母、姉と1才の姪、妹もてんでに最小限の食料を持った。大切な物は防空壕の中にいれ入れ、出入り口や窓は板で釘付けにし、着のみ着のまま住み慣れた我が家を出るが、これが最後になろうとは夢にも思わなかった。これが地獄の逃避行の始まりで、二度と家に帰ることはなかった。以来今日に至るまで再び訪れることもなかった。

銀行に貯金をおろしに行くが大混雑で、やっとわずかな金額が払い戻されただけだった。一般民間人はこんな状態の中であわてふためいて、右往左往していた。そ

れにひきかえ、陸軍官舎、道庁職員官舎の住人達は、いち早く情報を得て列車で南下していてもぬけのからであった。3日間位山中に逃げておれば、そのうち家に戻れるだろうと、誰もが信じて疑わなかった。道路へ出ると、おびえて逃げまどう人の列が連なり、子ども、老人の歩みは炎天下で遅々として進まず、リヤカーの上に、お産したばかりで白いチマチョゴリを血に染めた朝鮮の女の人が引かれて行く姿もあった。8月15日の敗戦の日までは、当然日本人も朝鮮人も一緒に逃げていたのである。

艦砲射撃をうけたのか清津港から煙が上がっているのが見える。家族の中に老人や病人がいる人達は逃げることをあきらめて自決したという。歩き疲れ日が暮れると家族は一かたまりに寄りそって防空壕に入り、真っ暗な中で行く末を案じながら、まんじりともせず夜明けを待った。壕の外に数名の兵隊がいた。耳をすまして話し声を聞くと朝鮮語ばかり。ああ、もうここには日本の兵隊さんはいないのかと、更に不安がます。夜が明けるとまた人の後に続いて北へ北へと歩く。険しい山道にさしかかると、持ち出した大切な荷物を疲れと暑さから少しずつ道ばたに捨てていく。命をつなぐ水と食糧だけを持って、日鉄の社宅から行動を共にした隣り近所の人たちと励まし合い、ただひたすら銃火をのがれて歩いた。炎天下に延々と続く避難民は、屠殺場に連れていかれる家畜の群れのようにだった。川が流れているところに来れば、持っているわずかな米を洗い、川原の石を積み上げてかまどを作り枯れ枝を拾い集め、お粥を炊いて食べた。又河の流れで赤ん坊のオムツを濯ぎ、棒に通して歩けばいつの間にか乾いた。

8月9日から逃避行が始まった。すぐに帰れるものだと思っていた逃避行であったが、半年以上にわたった。

清津の家を出てから3日目、背中の勝子がぐったりとして、体は冷たく目も開けていないことに気づきおろおろするばかりであった。その時、神の助けか兵隊さんの一隊が通りかかり、その中に軍医さんがおられたのか、うろたえている私たちに気づき、応急処置をしてくださった。「私もこの位の子どもを日本に残してきました」と言われた言葉が今も心に残る。その人もきっと、シベリアに捕虜として送られたことであろう。日が沈むと歩き疲れた身体を寄せ合って夜露で濡れた草の上に眠り、身体が冷たくて目がさめる。日が昇るとまた歩く「逃避行頭上に星のおつる夜や」と、父は詠っている。生家の父の墓碑には、この句が刻まれている。

さらに北を目指して歩く。茂山^{モサン}の山中でソ連機の機銃掃射にあう。皆蜘蛛の子を散らすように木陰に駆け込む。日に日に食べる物も少なくなり泥水をすすする日々に、乳幼児は一番先に弱り、目は落ちくぼんでゆく。暑い日は夜どおし山の中を歩き昼木陰で眠った。一緒に社宅から逃れてきた人達も先になり後になりながら歩くが、絶対に列から外れることは出来ない。北鮮と満州の国境に近い白岩^{ハクガン}まで唯々歩いて行く。鉄道の線路沿いの道に出た。丁度そこへ、日本の兵隊さんがいっぱい乗った無蓋車が通りかかり、私たち避難民に向かってちぎれんばかりに手を振った。私たちも一生懸命手を振って別れた。行先はシベリアであろう。涙があふれてやまなかった。日本は負けたいしと人の口から伝わってくる。まさかそんな筈はない……と思うが、日本人に対する態度が急に変わった朝鮮人。畑のジャガイモを掘っても見逃してくれていたのが、追いかけて来て石を投げる。そして口々に「日本が負けた」と叫ぶ。

白岩洞駅から南へ行く無蓋車が出るという情報が聞かれ、藁をもつかむ気持ちで駅の周りで、列車が入ってくるのをじっと何時間も待つ。いつ列車が来るかわからないので、少しでもそこを動くことはできない。その中に髪をふり乱してふらふらとさ迷い歩くハダシの中年の女の人がいた。目はうつろで放心状態で狂っている様子であった。子どもと離れたか、死に別れたか……。

何時間待ただろうかやっと無蓋車が入ってきた。我先にと列車に突き進んで、よじ登り手をさし出して家族を引き上げる人たち、人・人・人が山盛りである。無蓋車だから、ガタツと揺れると振り落とされる。トンネルの中で人が落ちたのか悲鳴が聞こえる。列車は止まるわけでもなく、なすすべもない。やがて吉州^{キョシヨウ}の駅で停車、全員下ろされる。そこではじめてソ連の兵隊を見る。大きく赤い顔で頭は丸刈りである。一番先に敵前に上陸したのは囚人兵だという。避難民の一行は線路伝いに南へ南へと歩き続ける。鉄橋にさしかかり、下を見ると足が震えるような激流、赤ん坊を前に抱き一人は背に、両手に鍋釜、泣く子をなだめたり叱ったりして渡る親たち……。

鉄橋を渡ればまた暑い日盛りの道を、前の人のあとを只々歩くのみである。一步でも南へ進めば日本に近づける……と。その人の列に未熟な西瓜を売る朝鮮の人、水がほしくて、法外に高い値段でも、喉のかわきを癒そうとして買う人。金を持たない者は泥水をすすするしかない。青いリングを日本人が畑から盗んだと追ってくる

朝鮮の人。これから私たちの運命はどうなるのだろうか。誰も口をきかず黙々と歩く。

姉の子も勝子も私の母乳が全く出なくなったので、代わりにコーリャンのお粥を食べていたので、下痢が続いた。

やがて城津^{ジョウシン}（日本の大企業が進出していた所）についた。北から市内へ逃れてきた避難民は、小学校内へ収容されたが、すでに校内には城津在住の人たちが収容されていて教室は一杯である。後から来た私たちは廊下に、一家族畳2枚位、やっと横になることができる程の場所を与えられた。山の中をもう歩くことはない、これで落ちつくとあたりを見まわすと、日鉄職員の家族があちこちに見える。お互いに無事にここまでたどり着いたことを喜びあった。しかし、この城津こそが地獄の始まりであった。

女は頭を刈り男装し、ナベ底のススを顔に塗って汚し、帽子を深くかぶった。18歳の妹も豊かだったおさがみを父の手で刈られた。夜ともなると暗い校舎の中でソ連兵がピストルを突きつけて「女を出せ」「時計万年筆を出せ」と身体検査をする。暗闇の中からピストルの音が毎夜のように聞かれた。そのような中、廊下には弱り果てた避難民が横たわり、栄養失調の幼い子どもたちの息は絶え絶えで虫の息であった。姉の子（鴻子）も勝子も下痢が続き、やせ細って目ばかりがギョロリとしていた。リュックサックの底に縫いこんで隠していた父のスイス製の時計も持っていかれた。わずかばかりの金で朝鮮人の農家から米を買い一家の命をつなぐ。数日たって南へ移動する列車が出るという情報を聞き城津^{ジョウシン}駅に集合し何時間も待った。その間にもソ連兵が少女を追う。荷物と人ごみの間を「助けて」と悲鳴を上げて逃げまどう。これから先は父のメモと照らし合わせて記録する。

9月14日午前11時都合よく乗車、10日振りに城津を発つ。煤煙の降りかかる無蓋車で一路南下、姉の子（1才）の容態悪く死は時間の問題である。日本兵を乗せた無蓋車とまたすれ違う。互にハンカチを振り合う。涙涙。夜11時咸興^{カンコウ}着。駅ホームに下車して、泥の如く眠る。9月15日午前10時頃咸興発南下する。この調子だと一気に京城に出られるかもしれないと一同大喜びする。元山^{ゲンザン}に午後2時停車。それより鉄原^{テツゲン}に至る。この間北へ向かって走る3本の列車に出会う。聞いてみると漣川^{レンセン}という駅で通行止めの由（この時点で38度線が敷かれた）。私たちを乗せた列車も鉄原から再び北へ逆に走る。無蓋車に同乗していた幼児死亡。姉の子

も終りに近づいた模様である。9月16日午前10時^{フッケイ}福溪に着く。11時に姉の子、鴻子遂に死す。列車の中だったので何の後始末もなし。一家涙にくれる。午後5時元山に着く。一同は構外に出ることを許されなかったが、死者が出たということで、特に許されて元山市中に出る。西本願寺に赴き事由を話し一夜を厄介になる。

9月17日、元山在住の知人を訪ね事情を話し、西本願寺で読経を受け、家族で近くの山に埋葬する。知人と別れ市内の日本人世話会を訪ねる。日本人世話会の幹旋で緑町の難民収容所に入る。

9月18日、元山に入って3日目「元山の治安は良く、城津とは雲泥の差なり」と父は記している。この収容所には日鉄労務課長渡辺氏以下238名が入っている。早朝より便所作りや収容所内の清掃に務めていた。「純江の容態面白からず、病院に赴く。由美・明の2人は40日ぶりに風呂に入り、いろいろの品に恵まれて帰る。夕は久しぶりのうどんの味に舌鼓を打つ」という。

北から逃げて来た避難民何千人かが元山市郊外（元山は戦争中軍港でもと慰安所が集っていた地域で、私たちが入った建物は玉川楼など大きい建物ばかりであった）のこの収容所に集められた。男は使役（元山港から元日本軍が持っていた物資——大豆・コウリヤンをウラジオストックに送る積荷の労働）にかり出された。一日働いて、コウリヤン・大豆をわずかばかり与えられた。又朝鮮人の農作業の手伝いをして、少しの作物を分けて貰ったり、元山市内の日本人（やがて帰国する）に衣類や食べ物を恵んでもらい細々と命をつないでいた。夜になると、ソ連兵が「ヤボンスキーマダムを出せ」と収容所に入ってくる。そんな気配を察したら、素早く天井裏、中庭の繁みにかくれた。早く気付いたものが石油の空かんや洗面器の底を、棒切れで叩き収容所中に知らせた。方々からガンガンとなるすさまじい音で退散させた。今でも、この種の音を聞くと当時を思い出し、身震いがする。

ある夜、近づいてくる足音に素早く姉と妹を窓から庭へ逃がし、私は勝子をしっかり抱きしめ、母は顔や頭にグルグル包帯を巻いて病人を装い呼吸をひそめて暗闇の中でふるえていた。思いきり赤ん坊のお尻をつねって泣かす。「ダバイダバイ」（よしよし）と大きな手で、寝ておれというしぐさをして部屋を出ていった。生きた心地がしなかった。とてつもなく長く感じられた時が過ぎ、やっと足音が遠のくのを聞き、姉と妹を部屋に入れる。幸いにも私たちは難を免れたものの、少し経って外の部屋から突然の悲鳴とパンパンという銃声が聞こえた。抵抗して撃たれたの

であろう。

一日一日と元山市内の治安は良くなりつつあったが、昼間でも市内を一人で歩くのは危険であった。父は避難民を救済する日本人世話会会の仕事をするようになった。私は勝子を母に預けて、姉と一緒に朝鮮人の家の手伝いをした。食事を食べさせてもらうだけであった。敗戦によって日本人と朝鮮人の立場は逆転してしまった。収容所に入って初めての冬を迎えるころから、発疹チフスが蔓延し、極度の栄養失調で毎日のように死人が出て、日を追って増えるばかりであった。姉、私、妹と次々に発病し、枕を並べて高熱にうなされ、死線をさまよった。昭和20年12月28日妹が息を引き取った。姉と私はかろうじて助かったが、間もなく母が倒れ、翌21年1月27日に亡くなった。父も続いて倒れたが死だけは免れた。しかし、8月9日に7人で羅南の家を出てから4か月の間に4人だけになってしまった。

夜が明けると収容所の中から遺体がいくつも運び出され、乳幼児はカマスに何体も入れられ、大八車に乗せ郊外の死体処理場へはこばれた。零下20度近い酷寒の中では、ツルハシで穴を掘ることも大変な事であったと聞いた。その場面を父は次に詠っている。「元山^{ゲンザン}里 墓掘る人の髭つらら」と。全員が死亡した家族や子どもだけが残されたやるせない家族があった。死んだ人から衣類をぬがせ、寒さをしのぐ人もいた。誰が止められようか。日を追って老人子どもたちが先に死んでいった。やせ細って目ばかりギョロギョロとした勝子が広い収容所の廊下を一人這っている姿がせつなかった。母も妹も亡くなり、昭和21年の年があげ、春らしい日差しが出るようになって、引き揚げが始まるという情報は、待てども待てども、いっこうに聞こえてこない。このまま元山に留まっても帰国の見通しは立たず、あせりを感じている人達が、密かに集まっては38度線突破の計画を練っているのに加わり遂に3月半ば、まだ夜の明けやらぬ暗いうちに一行(20人位)は収容所を抜け出した。勝子をおんぶして一行の一番後ろを一生懸命について歩いた。山道を南へ南へと歩き日が暮れると、覚えたばかりの朝鮮語で「今夜一晚泊してください」と頼んで、やっとのことで泊めてもらった。3月といっても山の中は雪道ばかり、父が捻挫をして一行からどんどん遅れてしまった。やっとここまで来て「一行を見失ってはならない」と父は無理して必死で歩いた。途中保安隊の取り調べに数回あった。大きな道路の交差点に来るとソ連のトラックと出合うこともあるので、2〜3名ずつが様子を見ながら走って渡ったりしたが、幾度となくヒヤリとするような

難関を経て、やっと 38 度線の目前まで来た。

雷鳴がとどろき、暗闇の中に稲妻が走る。父は私の背中から勝子をおろし代わりに父自らが背負う。息をひそめ、足音も立てぬようにと気づかう。心ばかりが焦る。その一瞬パーッと明るく稲妻が光り、一行の姿が浮かび上がりひやりとする。次の瞬間、足の豆がつぶれて痛むのも忘れて、やっとの思いで 38 度線の国境を越えた。皆が皆、泣いて泣いて抱き合う。38 度線までは現地に詳しい地元の案内人がいた。

38 度線を越えて南下すると、そこには米軍の兵隊が待機していて、脱出してきた者を誘導し建物の中に入れる。そこで真っ白になるほど DDT（殺虫剤）をかけられた。その後、京城の収容所で一夜を明かす。これで「本当に、本当に日本に帰られる」と、一行の顔は明るい。京城から列車で南下し待ちに待った釜山港に着いた。釜山の収容所で初めて、そのころ日本で流行しているという「リンゴの歌」を聞いた。釜山港からは毎日日本への帰国船が出ていた。いよいよ帰国を前にして、上船の前に検疫があった。残念にも勝子の皮膚の発疹が天然痘の疑いがあるということで一週間、出発が延期になった。父と姉だけが上船した。出発が遅れることになったので、父は「一週間これで何とか命をつなげ」と言っ、自分の腕時計を外して私に渡してくれた。

一週間後、私も勝子も上船できたが時化のため長時間波に揺られて、やっとの思いで仙崎港に上陸した。父は釜山から船が着く度に「今日か今日か」と毎日迎えに来てくれていた。長い長い逃避行もやっと終わり、日本の土を踏んだ時の喜びは忘れられない。母、妹、姪と一緒に帰国できなかったのは無念でならない。それにしても勝子は、栄養失調で手首は大人の指くらい、足はパンパンにはれて水ぶくれのようであった。目は落ち込んで、本当によく生きてくれたと思う。

仙崎についてから、父の故郷に向かった。父の長兄の家（広島県三原市）に帰国の挨拶に行った。山陽本線河内駅で下車したが、そこからバスがないので、父と歩いて行った。この辺りは、どこで戦争があったのかと思うほど、何事もなかったように静かであった。従姉のフミさんが赤飯を炊いて帰国を祝ってくれた。翌日、主人の生家がある山形県に向かうため、山陽本線の三原駅から乗車した。

どの列車も復員の兵隊さんで超満員であった。東京駅から上野駅へ、穴のあいた地下足袋をはき、両方の手にはオムツの入った手提げなどを持った乞食のような姿は、どこからみても引揚者である。上野駅構内をうろうろしていると「オイ」と声

をかける男の人がいる。その人は紛れもなく、結婚して4か月目に中国戦線へ行くために別れた主人であった。主人は敗戦の日までは陸軍獣医大尉であった。昭和20年8月15日、米軍に武装解除され、天津港から佐世保港に上陸し故郷に帰ろうとして、焼け野原になった東京から上野駅に着いたところであった。神の引き合わせが偶然の再会であった。みすばらしい姿の私と勝子が目に止まったという。父と娘はここで初めて対面した。一家3人で主人の故郷に向かった。主人にとっては懐かしい奥羽本線、私にとっては初めての山形行きであった。列車の中で農家のおばさんが勝子に大きな焼き飯（おにぎり）を持たせてくれた。外地から帰ってきた者に対する思いやりとやさしさに包まれた。昭和21年4月25日^{あてらさわ}左沢駅より雪の残る道を歩き、やっと初めて見る主人の生家についたのである。

6. 山形

山形についてからは、私たち3人が加わって9人の大家族になった。そのうち北朝鮮^{シンギョウ}新義州から義姉の7人家族も引揚げて来て、16人の大所帯になり、義父は食料調達に大変苦勞した。毎日山や野に米の足しにする^{ふき}藪をつみに行くのが日課であった。一頭だけ残っていた乳牛を引いて畔の草を食べさせるのは主人の仕事で、絞った牛乳は家族皆には行きわたらないが、唯一の栄養源であった。

東北の農村の暮らしは見るのも聞くのも全部が驚きであった。言葉は全く理解できない。たった一人孤独をまぎらわしてくれるのは、言葉が話せない勝子だけであった。辛くて悲しくて言いようがない。命の危険はなくなったが、新たな苦勞が始まった。大家族の調理をするのはいろいろの火で、大きな釜を使う。焚き木は拾い集めた杉の葉であった。もちろん水道はなく、日々使う水は共同の清水^{しず}という浅井戸に、天秤で桶をかついで幾度も通った。足元がおぼつかなく、ふらふらと水を運ぶ姿を近所の人に見られるのが恥ずかしくて、暗いうちに起きて頑張った。

戦犯になり公職を追放された主人に仕事はなかったので、近郷から自転車で集乳した牛乳を買い入れ、それでバターづくりを始めた。名古屋へ行ってバターを作る遠心分離機（チャーン……クリームと脱脂乳にわけける装置）を買ってくる。1ポンド筒（1ポンド入る木杵の）に入れて、製品にしたものは神戸に送る。当時バターは高価でなかなか手に入らなかったのも、何とか生計を支えるほどの収入になっていたが、森永乳業会社が近郷の酪農家の牛乳を集めだしたため、零細な主人の手作

りバターは、たちまち止めざるを得なくなった。

自分の土地で牛を飼い搾乳した牛乳で乳製品を作らなければ駄目だと分り、牧場を持つことを計画した。学生時代軍事教練で行ったことのある、富士山麓に白羽の矢を立てた。当時国策で入植者募集をしていた静岡県庁に応募したが、静岡県人を優先したので希望は断たれた。日本中を探したが思うに任せず、落ち着かない日々を送っていた。最上川で鮎を釣り、気分を紛らわしていた時に、引き揚げ後広島で農業をしていた父から、広島に移るので来ないかとの誘いを受けた。

7. 現在地に入植する

主人の夢は「雲のように自由に生きることであった」ので、広島の現在地が気に入って入植することを決めた。暮らしの費用は養鶏で得ることにした。牛を買う資金もないので、手取り早い養鶏と、牛馬の診察をアルバイトにすることにした。国から割り当てられた開墾面積によって支払われるわずかな金で細々と暮らしをはじめた。1戸に4町歩（内2町歩は山林）が割り当てられた。（5,000円の返済金を10年間年賦で返した）主人には「乳と蜜の流れる桃源郷を作る夢」があった。

昭和23年秋にススキと笹の土地に初めての一畝を入れた。その頃6畳一部屋に親子4人（主人31歳、私23歳、勝子4歳、一途1歳）で住んだ。割り当てられた面積を開墾する為に、主人は月夜の晩も開墾鋤を振るった。荒起しされた土の塊を砕いて、笹の根を取るのが私の仕事であった。昭和25年11月に、建てた家に移り住んで1週間目の11月18日に拓子が生まれた。このころ主人は隣村の農協の非常勤の獣医師として就職。生活のためには背に腹は替えられず、獣医師と開拓と二股をかけることになる。私はひとりで畑を耕し、子どもを育てる日々が始まった。想像以上に厳しかったが、子どもの成長が楽しみであった。

資料二、河村英夫の手記

（判読不能な箇所は○○で示す）

8月15日

長夜の○から二三間 月の鮮人宅に入る 隣○

8月16日

更に町〇の新家に入る。モチ米五升の配給あり。

8月17日

午前八時発 山中に入る 行けども行けども、熱さきびし
途中勝子が病氣 夜山中の道ばたにごろ寝

8月18日

五時発、山を下り 郷に出る
新站と延〇の岐れ道 川本と会ふ 新站道に入り川
五時発 山又山 山中泊り 原地（人名）等と砂地にねる

8月19日

未明発（出発する） 再び山中
久し振り平地に出る。
新站と〇〇（地名）の岐路 川本、藤本と会ふ。
少〇〇〇新站をえらぶ
〇〇洞の川原に寝る次長等近所にあり

8月20日

未明発 午後三時半湖畔に出る 船なく一泊

8月21日

船なき為、午後五時発
湖畔〇〇月明、鴻子悪し

8月22日

午後二時湖畔の空小屋
未明発 十時新站着 米の配給
午後二時発汽車にて茂山行
〇〇駅泊り

8月23日

午後〇〇〇発、急行〇〇川辺に帰る

8月24日

野宿、榎本に会ふ

8月25日

汽車進まんとして進まず、何千の避難民を満載せるため牽引力足らず、

幾度も停車して、就中煤煙にまみれ、午後12時、漸く白岩に入る寒さきびしい。
標高2400米と言えば無理もなし、直ちに小学校に入り廊下にごろ寝

8月26日

日鉄組続々集まる。(昨夜留まった)学校を出で空家を求めて入る。夜中南京虫に襲われて眠れず、十二時止むなく出で、小学校に至らんも満員にて、鉄道電気横の小屋に入る。夜中鉄道員来り事務室に導き其処の机の上に眠る。人の情身に沁む。

8月27日

本日ソ軍入る。

電気区事務所外の小屋に、第二夜を明かす。寒気甚しく夜中目覚むること幾度か。

8月28日

本日も不安焦燥の裡に暮れる。市中に牛肉を求め久し振り珍味にありつく。

夜中、ソ兵の○あり。夕刻より降雨 雨漏甚しく閉口。

8月29日

昨夜の雨漏りに居を小学校にうつす

院長・渡辺氏同室なり 本部に赴き 情勢を聞くも 区々出発につき○○○○に末希望者のみ明日出発と決す 米5升の配給を受く

8月30日

午前十時発再び徒歩の旅。吉州まで十三里 四日間休養も甲斐なく歩は遅々として進まず。行く先行く先に流言に惑わされ乍ら、暘谷を過ぎ一農家に泊まる。藁の中暖し本日の行程三里半。

8月31日

早朝発。今日も暑さと戦い。病弱の一行ら励まし載徳に四時着。せめて一步でも延ばさんと。一 ○○ 進む惜べし。載徳より列車出ず。宮本等乗車し居れり。此処の民家に眠る。南京虫の大群。隣家に院長あり。今日梅津氏と会ふ。

9月1日

午後六時発 載徳にて羅津の捨子(※一緒に逃げているうちに、耐えられなくて捨てる事案があった)の件にて保安隊に捕えられ○○○○付けられる。暫くして難を逃れ載徳一里余の川原に泊る寒気甚しく眠られず

9月2日

未明○○○を出発。九時一四分着。

吉州に出ずべきか蘆洞に向ふべきか迷ひたる末、吉州に出〇〇とせしも吉州の情勢悪化の噂に、鳳岩より右折蘆洞に入る。途中所長・戸川君等と会し、一所に洞に入る。午後六時 鉄道社宅の防空壕に眠る。

9月3日

昨夜の蚊の大群にたえかね、社宅空家の炊事場を改造し移転す。田中氏より小川氏夫人死に瀕す。杉本医師の赤ちゃん死せる由 当地の保安隊〇〇〇

〇なり身体検査二度に及ぶ。所長・次長以下留置さる。不安の一夜

9月4日

所長等の留置に不安つる。発つに発たれんとして、終日いらいらと時間を過ごす。午後五時 所長釈放さる。二十八万円奪る由

五時半出発の予定にて家を出〇〇

列車来たり首尾よく乗車十時。

城津着駅前の路上で土に塗れて眠る。

9月5日

駅前 伊規須（人名）老人に会す 岡氏と廻り合い導かれて小学校に入る。新校舎三号に空所を見つけて、乞うて入室。ここの地元城津住民の避難せる室。親切にもてなさる 鴻子の容態悪し、前日に源〇（人名）に会ひ着物を貰う。

9月6日

食料尽く。粥米二回 空腹甚しく目の廻る如し、ここには日鉄組も大分集れる模様なり。羅南の近藤と会い、羅南第七班に加はる。醤油の配給あり。

9月7日

米全てなし。止むなく外とう背広にて米二升を得。ほっとする。夕方露兵来り四百円を奪わる。上田。宮沢と会す。鴻子の容態益々悪し。廊下でありし知人の子死亡。山本院長の子ら危うき由。

(9月8日～9月11日まで空白)

9月12日

午前十一時列車発の報に勇みて一同準備もそこそこに駅に出づ。待てども待てども列車発の模様なく遂に夜に入る。露兵の審問きびしく遂に八時学校に再び戻り嗚呼。

9月13日

三時より起き愈々今日は出発を。食事の準備をなし五時駅に出ず。大混雑十一時漸

整理成○乗車切符を貰い乗車直前、保安隊来たり男子全員集合を命ぜられそのまま船に乘せられ高周波（企業名）にて終日使役、午後七時帰り見れば○○逃れたる者全部乗車。我々のみ取り残され又も学校へ帰る。

9月14日

今日赴く筈の労役をのがれ、列車出ずとの報に十時駅に赴く。十一時都合よく乗車十日振り城津を発つ、煤煙に真黒となり一路南下。鴻子の容態依然険悪、時間の問題か、夕方捕虜部隊に会ふ。互にハンカチを振り合ふ涙々々々。

午後十一時咸興着駅ホームに下車。泥の如く眠る。

9月15日

午前十時頃咸興発南下す。この調子だと一気に京城に出られるかもしれないと一同大喜び。このあたり城津と異なり物価も安定し元山にて二時間停車。鉄原に至る。この間逆行の三列車に合う。聞けば漣川に閘所あり通行止めの由。案の定、鉄原より逆行。同車の童女死亡。鴻子も終り近ける模様。カンフル注射受く。

9月16日

十時福溪に着十一時鴻子遂に死す。車中涙の○後始末もなし。涙に一家濡れ乍午後五時元山着一同構外に出るを許されず、近藤等と別れ、(死者が出たということで)特に許されて市中に出る。西本願寺に赴き事由を話し一夜を厄介になる。

9月17日

午後六時弘津氏（※成原明の説明：母の知人）福田二郎氏を訪ね、事情を語り西本願寺の読経を受けて福田・貞・由美と四人墓地に至り埋葬。福田と分かれ日本人世話会を訪ね、その斡旋にて緑町玉川楼に入る。

9月18日

元山に入って3日目元山の気風よく、城津と雲泥の差なり。玉川（楼）（※成原明の説明：元山は軍港であり水兵も多かったので、慰安所もあり7棟の建物があった）は、ソ連軍の侵入によって、多くの人が出て行き、建物は空になった。そこに渡辺氏以下238名の避難民が入った。便所が足りないので、早朝より便所作り・清掃をした。元慰安所と言うことで、韓国人に案内させてソ連兵がやってきて「ヤポンスキーマダム」と叫んだ。「銃声と男の悲鳴が聞こえたこともあった。」という。純江容態面白からず病院に赴く。由美、明の2人40日目に風呂に入り、いろいろの品を恵まれて帰る。夕食は久しぶりのうどんの味に舌鼓を打つ。班長会議 雑穀

配給ある由、浦辻（※成原明の説明：人名）来る。

9月19日

雑穀キビ9合配給。食糧難の場合大いに助かる。市場に行くと、あらゆる品目の自由に購買されているに驚く。内地帰還の目途未だ不明暗澹たる気持なり。夜、後藤来る。

9月20日 晴れ

夜早く床に就く為、暁待ち切れず午前4時起きて炊事。今日市場に行き兼元・内藤に会う。何時までこの生活を続けるのか。今日で40日。

9月21日（日月の記入だけで、以下余白）